

形容詞と名詞を結合する中間的な存在 — 要求との不一致がもたらす効果 — *

菅谷友亮[†]

概要

形容詞は、結合する名詞に対して概念的な要求をもっている。名詞はそれに呼応して結合がなされ、最終的に意味が形成される。しかし、そのような形容詞による要求に対して名詞が不適合である場合、表現全体として不自然、もしくはそれと表裏一体の関係にある修辭性の様相を帯びる。おのおのの形容詞がどのような要求を持っているかは、コーパスを利用して共起関係を調査することで推測される。共起名詞が属する範疇の偏りが、形容詞による要求と対応していると考えられる。本調査により、共起名詞が集中している範疇以外に比喩的拡張した意味が結びつく、また同時に、不自然な、及びに修辭的な表現が位置づけられることが明らかになった。

1 序章

1.1 語と語のあいだ

人間言語は、意味をもった複数のパーツの組み合わせによって表現を行い、聞き手はそれぞれのパーツとそれらのパーツの間を読み込み、表現全体を理解する。最も単純な例として [形容詞 + 名詞] の表現がある。例えば、「速い車」という聞き慣れていて難なく理解できる名詞句を考える。これは速度を表す「速い」という形容詞と物理的物体である「車」の組み合わせであるが、我々は車の移動の速度において速いものであると問題なくわかる。ここで「移動」という二つの概念を結びつける仲介的な存在 (Langacker 2008, 332) があり、人間の脳の中で自然に処理される。このような仲介的な存在の補填がどのようにしてなされるかは明らかではないが、ここでは、関係概念 (relational predication) である形容詞の中に存在していると考えられる。つまり、形容詞は仲介的な存在の指定をもっていて、それに適用するように名詞に要求するのである。例えば、形容詞「速い」が「移動」という指定を有しており、「車」のような動く物体を要求している。よって、「?速い靴」はおかしいのである。

1.2 修辭的拡張と慣習化

内省からわかるように、「速い車」「冷たい飲み物」「悲しい出来事」と比べて、「?速い靴」「?冷たい朝」「?悲しい靴」は主観的におかしい、もしくは解釈に困る表現であると言えるであろう。

基本的な結合関係の逸脱が解消される方法としては二つある。一つは、形容詞が転義することによって要求が変わることである。例えば、「軽いノリ」「寒いダジャレ」という表現は、すでに慣習化しているが、字義の意味からの変容を歴史的に獲得したことにより容認されるものである。ここで、「冷たい色」のような共感覚比喩の表現も同様であると考えられる。もう一つは、形容詞の意味は字義的であるが、名詞との関係が遠いまま名詞と結合し、修辭性を帯びることである。例えば、転移修飾の表現である「悲しい夜道」「楽しい酒」(山梨 2000) は感情を抱く主体を通して結びつけられる。これは、中間的な存在の異変として考えられる。そして、異変である故、転移修飾は修辭的な表現として位置づけられるのであろう。しかし、こちらも、よく使用される表現の場合、すでに修辭性は感じられないことがある。

* 本稿は科研費 (特別研究員奨励費、研究課題番号: 13J00431) の助成を受けている。

[†] 所属: 京都大学大学院人間・環境学研究科 / 日本学術振興会 (JSPS)

2 要求の明示化

形容詞の要求それ自体は分析可能なものではなく、実例から推論するほかない。各形容詞が、どのような要求をもっているかを明らかにする方法は、(i) 内省を繰り返し仮説を立てて実証していく方法と (ii) 定量的に実際の用例を集めて推測する方法があると考え。本論文では後者の方法をとる。

2.1 方法

それぞれの形容詞がどのような種類の名詞と共起するかを客観的に調査するため、用例収集には、KOTONOHA (日本語書き言葉均衡コーパス [BCCWJ]) のコーパス、名詞が属する範疇の判断には、日本語語彙体系 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所) を利用した。形容詞が要求することにより、共起名詞が集中した範疇 (以下、D カテゴリーと呼ぶ) を明らかにするため、以下のような手順で調査を行った。

- (1) それぞれの形容詞に関して、コーパスから、(a) [形容詞] [名詞]、(b) [名詞] が [形容詞]、(c) [名詞] は [形容詞] の 3 種類のデータを抽出する。今回は形容詞に時制や否定などの文法マーカを含むものは扱っていない。
- (2) 全ての用例に関して、[名詞] が形容詞のかかる主要部名詞となっているか確認する。どの名詞にかかっているか曖昧なものがあったがそれは著者が文脈により判断した。
- (3) トークン頻度が 2 以上である主要部名詞に対し属する範疇を調査し、集計をおこなって、D カテゴリーを明らかにする。日本語語彙体系は 9 つまでの階層的なクラスを有しているが、本論文では第 4 次区分まで利用することとする。

以下では、「寒い」「冷たい」「悲しい」の 3 つの形容詞に関して結果を示すこととする。「寒い」の事例は 1409 例 (内、[形容詞] [名詞] が 1347 例)、「冷たい」は 2492 例 (内、[形容詞] [名詞] が 2149 例)、「悲しい」は 1283 例 (内、[形容詞] [名詞] が 1146 例) がデータ集計と分析の対象となっている。

2.2 結果

第三次区分における共起名詞の偏りを図 1、第四次区分における共起名詞の偏りを図 2 で示している。まず、図 1 から明らかであるように、二つの最大の山があり、「寒い」が【抽象的關係】、「冷たい」が【具体物】と共起関係をもっている。その次に大きな山として、「冷たい」と「悲しい」は【事】と共起するということが明らかである。

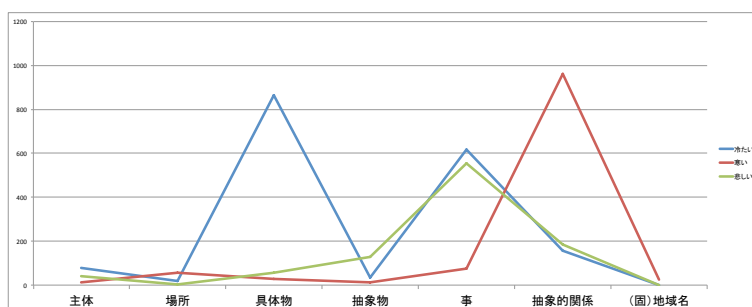


図 1 第三次区分における分類

さらに図 2 にて詳細をみることができ、「寒い」は【時間】、「冷たい」が【無生物の具合物】、もしくは【自然現象】、「悲しい」は【人間活動】が D カテゴリーであると言える。図より、「寒い」と「冷たい」は明らかに相補的である。それは、国弘 (1981) で言及されているように、「冷たい」は <体の一部が感じる冷感> であり、「寒い」は <体温中枢

が感じる冷感>であると分析されるように、これらの形容詞が名詞に対して要求することが相補的に異なることの反映である。英語の場合は cold という語で両方を表すので、要求は分離されていない。

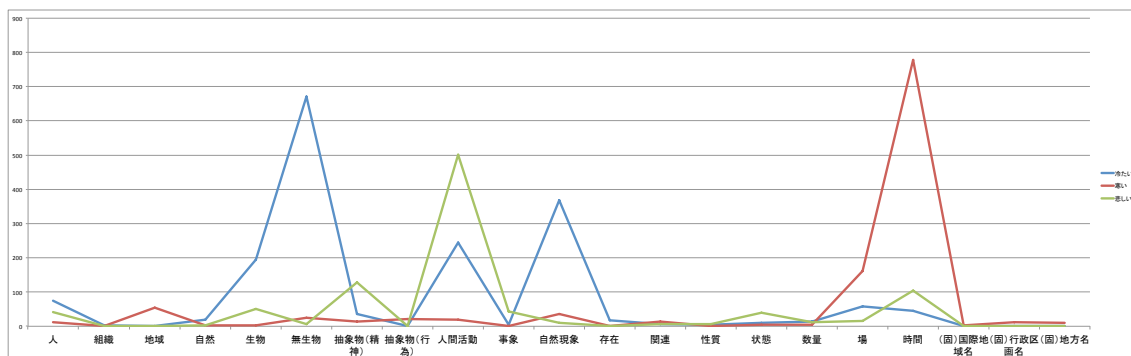


図2 第四次区分における分類

ちなみに、「寒い」は【場】や普通名詞や固有名詞の【地域】も多数みられる。「冷たい」は風や雨などの【自然現象】と多く共起していることも注目に値する。

3 要求との不一致

3.1 比喩的拡張

最初に、比喩的な拡張をした語彙 (e.g. Lakoff1987) が、要求の不一致を起こしている、つまり、非 D カテゴリーの共起名詞と結合していることを示す。

方法は、前調査のデータを基にして、一個一個の事例に関して字義の意味を逸脱しているか、及びに修辞性があるかどうかを判断する。そして、前調査と同様に、意味範疇毎にデータを集計する。ちなみに、比喩的なものかどうか曖昧なものもあったが、著者が文脈により判断した。ここでは、紙面上の都合、「冷たい」に焦点をあてて議論する。結果は以下のとおりである。

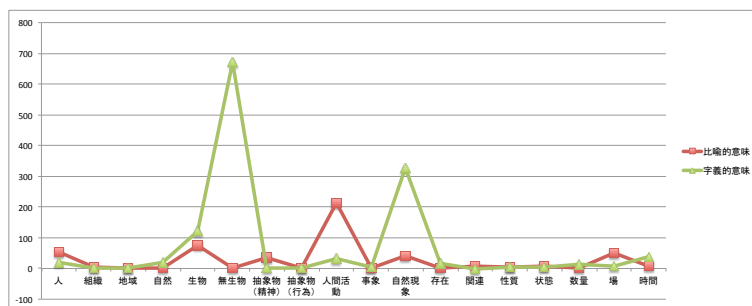


図3 「冷たい」の比喩的意味と字義的意味

図2の「冷たい」のグラフと比較して明らかであるように、3つめの山(【人間活動】)は転義によってもたらされている。よって、字義的な「冷たい」は【具体的な無生物】か【自然現象】がD カテゴリーであり、物理的な接触を形容詞は要求しているといえる。また比喩的な意味の中でも、8割(396/495)が「冷たい人」「冷たい眼差し」など広辞苑で「人情に薄い。冷淡である。」という意味として(2番目に)掲載されているものである。ちなみに、同辞書の最初の項は、「温度が低く、ひややかに感ずる。」であり、その順番・内容は本調査結果によって裏付けられる。ただ、共感覚比喩などは辞書に記載はない。

また言及しておく、「寒い」の場合は事例の殆どが字義的な意味であった。よって、「冷たい視線」と比べて、つまらないという意の「寒い」が使用される「寒いダジャレ」は修辭的であると、このデータから言える。「悲しい」の場合は、慣習化した転移修飾の現象が多々みられた。

3.2 逸脱的、修辭的な表現

最後に、形容詞の要求と一致しないことにより、表現として容認されなくなるか、修辭的な性質を帯びることを示す。上で明らかにした要求は、選択制限を具体的・数値的に表したもので、要求の不一致は、選択制限の違反であるといえる。修辭的な表現というのはこの選択制限の違反が重要な役割をになっていると言われる(山梨 1988: 20)。本調査においても、表現として不自然であるのか、修辭的な表現として容認されるものなのか、判断が難しいものがたくさんあった。この調査において、それらはほとんど非 D カテゴリーであった。すべての例を挙げることはできないので、以下に数例だけ示す。それぞれコーパス内の事例である。下線は筆者による。

- (1) 私は 冷たいざわめきの中をゆっくり歩き、パソコンの前に戻って、女の子の淹れてくれるぬるいお茶を待つ。
- (2) こんやは さむいうどんをすすろつろつろ

4 おわりに

以上のコーパスに基づく調査において、それぞれの形容詞の要求、さらに、修辭的な表現、ないしは不自然な表現が D カテゴリーに属さないものであることが示された。しかし、D カテゴリーから外れているというだけでは、形容詞がもつ要求は完全に明らかになったとは言えない。例えば「赤いチョコなら気持ちが伝わる(ロツテガーナチョコのコマーシャルより)」という表現は、白や黒のチョコとはいうように、色は【無生物の具体物】を共起名詞として要求する。しかし、「赤いチョコ」は依然として修辭性が高い表現であろう。さらに詳細に要求があるが、このコーパス調査からでは明らかになっていない。今後の課題としたい。

また、以上のような現象は、概念と概念の衝突によるものであるため、言語特定のではない。他の言語でも同様な分析が可能であり、データとして使用可能である。よって、さらなる今後の課題として、日本語のデータを収集すると同時に、収集可能な他の多言語でデータを収集し、修辭度や容認度を計るための重要な指標をつくり、最終的に、人間言語において重要な、語と語の間の読み込みや拡張プロセスを明らかにしていきたい。

参考文献

- [1] Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- [2] Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- [3] 国広哲弥. 1981. 『日本語比較講座 3 意味と語彙』、東京：大修館書店.
- [4] 細川英雄. 1986. 「風は寒いか冷たいか - 温度形容詞の用法について -」 『国語学研究と資料』 1-13.
- [5] 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』、東京：東京大学出版会.
- [6] 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』、東京：くろしお出版.

辞書・コーパス

『広辞苑第六版』(CD-ROM 版) 新村出(編) 東京：岩波書店

『日本語語彙体系』(CD-ROM 版) NTT コミュニケーション科学基礎研究所 東京：岩波書店

KOTONOHA 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(国立国語研究所) <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>